

老人性痴呆をみつめる

富山県農村医学研究会 越山健二

人口の高令化を迎えて、特別養護老人ホームや老人病院が増加し、老人保険制度改革が論議され、老人施設が緊急課題として取りあげられている。独り暮らしの老人や、日常の生活動作が出来ず、寝たきり、痴呆老人も増加の傾向にある。老は誰もがたどる道であり、老後を案じ不安を持つ人も多くなってきた。

ねたきりや痴呆老人には、排便や摂食、入浴など、生きるための基本的な動作が出来ない人が多いのだが、これを養護し、介助する介護者が、看護婦の補助として老人施設に勤務している。

私は時々、これ等の人たちと、勤務の内容について討議する機会がある。多くの老人は疾病の軽重にもよるが症状や、その人柄によって、介助の内容や処置もまちまちだが、苛酷な労働で苦勞も多いが総じて可愛い人たちであるという。

患者さんの多くは、無気力、無感動、無関心で、視力や聴力の衰えもあり、新聞、テレビなども、余り興味ももたず、終日静かに休んでいる人が多い。その中で一部歩行可能でうろうろと徘徊する、痴呆老人がいる。日時や、場所を間違え、親族、知人も忘れ、時には幻覚なども加わり、さまざまな妄想がわき、独語や嬌声、怒りなど、徘徊や、夜間せん妄、錯乱状態で、暴力をふるう事もまれではない。周囲の患者さんにも迷惑でもあり、その介助対応には心身共に苦勞が多いのである。しかし幸な事に、この様な常人に理解し難い行動も長期にわたって、持続する事は少いようである。

家人からこのような症状の訴があり、入院してきた人でも、入院後にこんな症状が全くみられない人もある。かつて、有吉佐和子氏によつて書かれた小説「こうこつの人」は、広く読まれ痴呆に対する理解が広まったのであるが、一般の認識は、老人痴呆の介護は家族にとつて想像以上の心身の苦悩を伴い、家庭生活を破滅におち入らせる程の大きな負担を強いるものだという印象が残されたようである。最近では老人性痴呆を討象としたマスコミの情報も多く徘徊、幻覚、妄想、錯乱など強烈に強調され、拡く認識を深めるためとはいえず少し行きすぎのような気がしてならない。老化すれば誰でも軽い物忘れや、多少の失見当もあるものだ。そんな時の周囲の対応が大事なような気がする。軽い症状の出現がありその誤りを指摘し、怒り、おどし、なじり、馬鹿にして恥をかかせるなど、不適切な対応は一層症状を悪化させ、家人の不安や危機感がつって、やがては、やっかい視されて入院する患者さんも多いような気もする。

脳は、知、情、意の高次の機能をもち、まさに生命の中枢で身体の中のどの部分にもまして血液の流れが多く、多量の酸素やブドウ糖を要求し、大きなエネルギーのかたまりだという。脳の神経細胞数は150~200億ともいわれ、1つの神経細胞には1本の軸索突起のほかに細胞体の周囲に樹木の枝の如く多数の樹状突起が出て多数の小枝に分れ、おのおの数万个以上の葉に相当する部分がある。即ちレセプターという受容器で、その受容器には他の神経からの軸索突起の末端がそれぞれ連絡して

いる。その部分には極く微量の化学的物質が生成されて刺戟の伝達が行われているという。

脳は既に受精後、母の胎内にある時期から、150億個もの神経細胞が整備され、人間として発育してゆくのであるが、胎生時代からすでに胎児と母親の心情も含めた相互作用によって、神経細胞相互の連絡（配線）が密になり、樹状突起のレセプターが増加して、知情、意の人間性が培われてゆくといわれている。この事は生後は勿論、乳児期から幼児期、学童期、青年期と一生を経過する中で、家庭、地域、学校、職域などで、学習、訓練によって、神経繊維の発育をうながし、各々密接にからみあい、知情意のほか、もろもろの高次の機能が高まって豊かな人間性や、人柄が形成されてゆくものと推定されている。

一方脳の老化は、他の身体組織に比して、早くからはじまる。神経細胞は青壮年期から減少しはじめ、60才頃になると1日20万個以上も減少するといわれており、視聴覚などの感覚や、運動の高次神経の衰えがじょじょにはじまり、全般に、知情、意の変化、衰弱の傾向になるが、個人差が強く、老化の示す姿はまさに多様であるという。

寝たきり老人や、痴呆老人は、長年にわた

って生き抜き、学習し、習得、経験した事は、脳神経細胞の複雑なからみの中で、尚密接に連携していると思われる。何等かのストレスをきっかけとして日常家庭や職場の中で、不適応な症状が出はじめ、家人や周囲が迷惑し危機感をいだく事になるが、多くは豊かな人間性が残され、いたわりや、思いやり、感謝や報恩、勤勉で、質素、自己犠牲や、身だしなみや、礼儀、言葉づかいなど、長年身についたほのほのとした爽やかな人間性が残されている事もあり驚く事が多いのである。

物質の豊かさを求め、利得行為にあけくれる我身を反省する事もまれではない。

今日科学技術の進歩はめざましいが、脳の形態や、機能の解明は、ほとんど一部分で、不明の事が多いのである。何れにしても長年生きぬいてきた人生の終末を、人間らしく終えたいものだと思う。私共は老化はさけられないのである。

老人が増加し、老人痴呆も増加するが、その病理や病因、診断、症状など、わからない事があまりにも多く、したがって、医療は勿論、養護、福祉をふくめた対策は今後の大きな課題であり、これからの研究解明を期待したい。